

# 男長

## ひとりごと

(43)

斉藤 讓

空梅雨が通りすぎ、いよいよ本格的な夏の到来である。今年の夏は、久方振りに暑い夏になりそうだ。

ここ数年夏の異常気象が続き、農業や海の観光も振るわなかっただけに、今年にかける期待は大きい。偉大なる自然の恵を願うところである。

▼ところで、木戸浜は七月十五日に海開きを行い、海水浴のスタートをきった。

暫く振りに訪れた浜辺は、かつてのなだらかな波打際に砂が盛りあがり、急に海へと落ち込んでいた。この急激な変化は驚きであり、かねてから懸念していた海岸浸蝕の前兆のようであり、心が寒くなった。

東総の海岸浸蝕は、飯岡海岸にはじまりその速度は意外に速く、まるでドミノのように次々と海岸を破壊し、隣町野栄の海岸にまで及んできている。この保全対策には、巨額の費用を必要とするため、対

策はなかなか思うように進まず、関係市町の焦りは大きい。浸蝕されてからの対策では遅すぎるのである。

テトラポッドやコンクリート護岸を施した浜辺は、確かに防災対策の効果をあげてはいるが、出現した景観は、残念ながら以前とはまるで違う、砂を噛むような味気ない姿と化してしまっている。

一度消えた自然は、決して再び甦えることはない。何としても自然の景観を残した対策が、一日も早く実現できるように今以上に強く国・県に働きかけていかなければならないことを痛感した。

▼いま目の前に広がる九十九里の海は、あくまでも雄大で、潮は白い波濤をたてながら悠然と流れている。

潮の香が鼻を擦り、潮風が頬を打ち、潮騒が耳を揺ると、身体中が大海原に吸い込まれるような思いがしてくる。同時にまた胸の奥からは、遠く過ぎ去りし子供の頃の思い出が、郷愁にも似たセンチメンタルなメロディを奏でながら蘇ってきた。

▼私をはじめて見た海は、小学校三年生の時に遠足できた、この白浜の海である。

南条小学校から栗山川の堤防を歩き、辿り着いた河口の先に果てしなく広がる海原を見たときのあの感動は、今もつて忘れることができない。あの海は、私にとって憧れの海であった。私にとつて憧れの海は、近くて遠い海であった。尤も、当時はそんな家庭が多く、とに角貧しい時代、貧しい家庭であった。それだけに、はじめて見たあの時の海の印象は強烈であり、私は決して終生忘れることはないであろう。

▼それに比べて、いまはどこかの家庭でも当時とは比較にならないほど生活は豊かになり、かなりの余暇も生まれている。いまこの余暇をどう有効に活用するかが、大きな社会問題・行政の課題となつてきている。

国はいま、リゾート法の制定して全国に保養地の整備を促し、地方自治体は、スポーツや文化施設を建設してこれに応えようと躍起になっている。高高三、四十年の間に出現した貧と富の二つの社会を比べれば、まさに隔世の感がする。

▼子供が夏休みを迎えると、海や山はどこも家族旅行客で、芋を洗うような賑わいを見せる。旅を通じて親子の絆を強くし、行く先々の自然や風物に触れることは、親はもとより子供にとっては掛替のない心の糧となることであろう。唯、物の豊かさは、ある面で物の本当の有難さや貴さを稀薄にすると同じように、子供達には旅なれて旅の新鮮さや自然に感動する心を失なつて欲しくなってしまう。

▼今年、わが家に近い畑の間に植えた巴旦杏が、二、三十個赤い実をつけた。

小鳥や昆虫は寄つてくるのであるが、近所の子供達は一顧だにしない。私達の子供の頃であったならばと思うと、今の子供達の行儀の良さを誉めるよりも、何れか一抹の寂しさが残る。

周囲の山には、いま白い山百合の花が幾つも咲き匂っている。しかし、誰もこれを手折る者はいない。これも自然愛護の心であろうか。決してそれだけではないであろう。私にはむしろ、子供の心が自然から遠く遊離してしまつたような気がしてならない。悲しいことだ。

▼絶間なく繰り返す潮騒は、幼き頃の追憶を賛歌し、現代に鋭い責問を投げつけているように思えた。

### 潮騒

の海の青さと轟くような潮騒の音、そして白い砂浜と松の緑の鮮かな対象は、山の中に育つた私にはまるで別天地にきたような驚きであった。

▼私は子供の頃に、父や母に連れられてどこかへ行つたという楽しい思い出はほとんどない。その頃の父や母は、いつも朝早くから夜遅くまで働きづくめに働いて、とても子を連れて出かけるゆとりは無かった。子供心にもそれを知っている私には、白浜の海へ行くことすら強請ることもできなかつた。

私にとつて憧れの海は、近くて遠い海であった。尤も、当時はそんな家庭が多く、とに角貧しい時代、貧しい家庭であった。それだけに、はじめて見たあの時の海の印象は強烈であり、私は決して終生忘れることはないであろう。

▼それに比べて、いまはどこかの家庭でも当時とは比較にならないほど生活は豊かになり、かなりの余暇も生まれている。いまこの余暇をどう有効に活用するかが、大きな社会問題・行政の課題となつてきている。

国はいま、リゾート法の制定して全国に保養地の整備を促し、地方自治体は、スポーツや文化施設を建設してこれに応えようと躍起になっている。高高三、四十年の間に出現した貧と富の二つの社会を比べれば、まさに隔世の感がする。

▼子供が夏休みを迎えると、海や山はどこも家族旅行客で、芋を洗うような賑わいを見せる。旅を通じて親子の絆を強くし、行く先々の自然や風物に触れることは、親はもとより子供にとっては掛替のない心の糧となることであろう。唯、物の豊かさは、ある面で物の本当の有難さや貴さを稀薄にすると同じように、子供達には旅なれて旅の新鮮さや自然に感動する心を失なつて欲しくなってしまう。

▼今年、わが家に近い畑の間に植えた巴旦杏が、二、三十個赤い実をつけた。

小鳥や昆虫は寄つてくるのであるが、近所の子供達は一顧だにしない。私達の子供の頃であったならばと思うと、今の子供達の行儀の良さを誉めるよりも、何れか一抹の寂しさが残る。

周囲の山には、いま白い山百合の花が幾つも咲き匂っている。しかし、誰もこれを手折る者はいない。これも自然愛護の心であろうか。決してそれだけではないであろう。私にはむしろ、子供の心が自然から遠く遊離してしまつたような気がしてならない。悲しいことだ。

▼絶間なく繰り返す潮騒は、幼き頃の追憶を賛歌し、現代に鋭い責問を投げつけているように思えた。